

映画『さらば、わが愛 覇王別姫』の 日本における受容の研究

燕 璐

序章

1、問題意識

中国における芸術領域の自由化は、鄧小平によって改革開放政策が開始され、その開放体制が本格化した1980年代半ばに始まった。映画界では「第五世代」と呼ばれる若き映画人が登場し、それまでとは全く異なる映画を作り始めた。例えば、田壮壮『盗馬賊』¹『青い嵐』²、陳凱歌『黄色い大地』³『さらば、わが愛 覇王別姫』⁴、張芸謀『赤いコーリャン』⁵『生きる』⁶等である。この第五世代の中でも、特に国際的に注目されてきたのが陳凱歌である。彼の代表作『さらば、わが愛 覇王別姫』は、国際的に大好評を博し、1993年第46回カンヌ映画祭でパルム・ドール賞を受賞した。「第五世代」映画は、世界でも多くの観客動員数をほこっており、とりわけ『さらば、わが愛』は世界で初めてメジャーヒットした中国映画である。これまで、同作のジェンダーに問題意識をおいた研究が盛んに行われたが、同作の海外における評価、受容状況についての研究は管見の限り未見である。そこで、本研究では、これまで検討されてこなかった日本における『さらば、わが愛 覇王別姫』の受容状況について考察したい。

2、先行研究

木谷富士子は論文「陳凱歌映画におけるホモソーシャル考 — 男たちの幼児性と母性の神話」⁷で、それまで『さらば、わが愛 覇王別姫』は多

くが蝶衣のジェンダーアイデンティティから語られたのに対し、母と子の物語として同作を討論しており、「母性の代弁者である菊仙の扱いが原作よりも映画で大きくなっており、菊仙の蝶衣、小楼に対する母性が随所に描かれる」と指摘し、同作が母をめぐるエクリチュールとして捉えられると結論を出す。さらに、張小青は論文「映画・京劇・異性装表現 —『さらば、わが愛 霸王別姫』についての考察」⁸で変装とジェンダーとの関係を明らかにしながら、「京劇の女形という異性装は、蝶衣の身体を通してジェンダーが不安定であることを自ずと暴露し、また同時に同性愛の欲望を語ることを可能にしながらも、その欲望を異性愛的表現のように装わせて表現する装置として機能しているのである」という結論を出す。そして、館ヶさみが「『霸王別姫』論に向けて — 眼差しの先にあるもの —」⁹で、『霸王別姫』を読み解く他の論考では、同性愛や現代史の問題を扱うものが多く、また程蝶衣という形象を中心に据えるものが多々あると指摘し、陳の第三作『孩子王』および第四作『边走边唱』にも登場する小道具の鏡に着目し、その作用を考えるとともに、作中の人物関係を整理した。

以上のように、同作をめぐるジェンダー（女性意識、同性愛・ホモセクシャル）について盛んな研究が行われてきた。だが、監督・原作家を論じる作家論、あるいは蝶衣のジェンダー問題を論じる作品論はあるものの、両視点からの論点を合わせ、鑑賞する側がどのように作品を見ているかについては、管見の限り論じられていないのである。

第2章 二つの『霸王別姫』物語

2.1 『霸王別姫』物語の展開

2.1.1 映画『さらば、わが愛 霸王別姫』のあらすじ

映画『さらば、わが愛 霸王別姫』は李碧華の小説『霸王別姫』をもとに1993年に制作された陳凱歌監督の第五作である。その主要制作チームと主演キャストは以下のようである。

表1：映画『さらば、わが愛 霸王別姫』の主要制作チームと主演キャスト

主要制作チーム		主演キャスト	
制作	湯君年、徐楓	程蝶衣	張國榮 (レスリー・ チャン)
プロデューサー	徐楓	段小楼	張豊毅
原作	李碧華	菊仙	鞏俐 (コン・リー)
脚本	李碧華、盧葦	袁四爺	葛優

映画『さらば、わが愛 霸王別姫』のあらすじ：

1925年、北京。ある冬の日、貧しい娼婦である小豆子の母親は小豆子を京劇俳優養成所「喜福成」に連れていく。可憐な顔立ちだが左手の指が6本という障害を持っていたため断られると母親は台所の包丁で息子の1本多い指を切り落とす。血を滴らせて泣き叫ぶ小豆子を師匠に引渡して去っていく。こうして小豆子は京劇俳優養成所に預けられ、過酷な修業の日々を送り始める。娼婦の子であるためいじめられる小豆子を守ってくれるのは、小石頭。やがて、可愛い顔立ちの小豆子が女形を、男前の小石頭が武生を演じることになる。大人になった2人は、それぞれ程蝶衣と段小楼という芸名を名乗り、『霸王別姫』で共演して有名になる。蝶衣は小楼に恋心を抱くが、小楼は娼婦の菊仙と結婚。傷ついた蝶衣は同性愛者である政治家の袁四爺に慰めを求める。蝶衣、小楼、菊仙の三人は抗日戦争、国共内戦、中華人民共和国の成立を経て、文化大革命を迎える。時代が変わるたびに、三人は過酷な運命に弄ばれる。特に、1966年に文化大革命が始まると、京劇は墮落文化の象徴として批判され、蝶衣、小楼、菊仙の三人は紅衛兵にリンチされて、精神的にも肉体的にも極限まで追い詰められていく。菊仙は小楼に愛していないから別れると言われて自殺する。1976年に文革の終息を迎える。翌年に蝶衣と小楼が再び『霸王別姫』を演じる。虞姫は霸王の前で別れの舞を舞いながらそっとその腰の剣を抜き取る。はっとして振り返り蝶衣の名前を呼ぶ小楼。蝶衣は虞姫と同じように剣を首に当てて自殺する。

2.1.2 『霸王別姫』物語の展開：テレビドラマ→小説→映画

→小説の成り行き

飯塚敦子が『『霸王別姫』論 ― 小説と映画を比較して ―』で指摘しているように、原作小説の映画化とは、原作小説をもとに映画が作られるという製作過程が一般的であるが、『霸王別姫』の製作過程は少々複雑である。

表 2：『霸王別姫』物語の展開

出版年月	出版社	出版状況	その他
1981 年 ¹⁰	—	—	香港電視のために、李碧華が『霸王別姫』というタイトルの二時間テレビドラマのシナリオを執筆。
1985 年 8 月	香港・天地圖書公司	初版	共 145 頁。
1987 年 7 月	香港・天地圖書公司	5 版	—
1991 年	香港・天地圖書公司	10 版	6 年で 10 版まで増刷。
1991 年 9 月 ¹¹	—	—	李碧華と蘆葦 ¹² が共同して、小説を脚本化。
1992 年 5 月	香港・天地圖書公司	修訂版初版	共 368 頁。表紙は映画スチール。
1992 年 9 月	香港・天地圖書公司	修訂版 9 版	4 ヶ月で 9 版まで増刷。
1993 年	北京・人民文学出版社	—	268 頁。表紙は映画のスチール。

1992 年香港天地圖書公司の修訂版初版（以下は 1992 年初版と略す）と映画版と物語の結末をまとめると、以下のようになる。

表3：映画と小説の結末の比較

	蝶衣	小楼	再会
1992 年 初版	文革中に甘肅省の酒泉に下放 → 文革後 1977 年北京へ（結婚、京劇の芸術指導） → 1984 年香港訪問。	文革中に福建省福州に下放 → 香港へ亡命（電車会社で働く → 老後失業保護を受ける）	1984 年 中国返還前の香港
映画	リンチされた後から 1977 年まで不明。 1977 年自殺。	リンチされた後から 1977 年まで不明。	1977 年 北京 京劇演劇場

陳監督は「私が監督として撮る以上、脚本には私が考えている内容が盛り込まれていなければ困る。その意味で、シナリオを作成する段階でも主導権は私にあった」¹³と強調し、脚本に大幅に手を加えた。1992 年版と映画との最も大きな違いは結末の設定で、後者におけるいわゆる香港の不在と主人公蝶衣の死だと考えられるだろう。小説では、文革後北京に戻り、結婚もした蝶衣と香港に渡った小楼とが 1984 年に香港で再会する。「二人は観客が去った劇場の舞台上で 10 数年ぶりに『霸王別姫』を演じる。クライマックスにさしかかり、蝶衣は衝動に駆けられて自分の首に真剣をあてる。その流れ出た血で、劇の終幕を実感し、自らが生きてきた人生のすべては劇にすぎなかったと悟るのであった。そして二人は別れ、蝶衣は北京へと帰っていき、小楼は返還への不安が高まる香港の街で以前と変わらず孤独な生活を続けるのであった」¹⁴。これに対して映画では、文革後の 1977 年、小楼と蝶衣が 11 年振りに舞台上上がり、京劇『霸王別姫』を共演し、蝶衣が虞姫のように愛を貫き、愛のために自刃し、物語は北京で完結する。1992 年初版は映画のシナリオとほぼ同時に執筆したと推定できるとはいえ、香港の部分と蝶衣の結末については 1985 年の香港天地図書会社の初版（以下は 1985 版と略す）と大きく変わらない。水野衛子による陳凱歌インタビューにおいて「原作がある場合は、どうしても原作と比較してしまいますが、ラストで、小説では文革後、段小楼が香港へ行き、京

劇をやめてしまいますね」という質問に対して、陳凱歌は「作者の李は香港人ですから、香港での出来事を描く必要があったのかもしれませんが。私は、この物語で段小楼が香港へ行ってしまったら全く意味が無いと感じたので変えたのです」と答えている¹⁵。陳監督が行った改編、特に香港の部分が削除されたことは、香港文化界に大きな不満を引き起こしたが、これについては、藤井省三が著書『中国映画：百年を描く、百年を読む』で詳しく論じているので、小論では省略したい¹⁶。陳凱歌はこれらの批判に対し、李碧華の小説が香港まで語り続け、複雑すぎるので、映画として制作できないと反論した¹⁷。興味深いのは、この論争に香港側の核心人物であるはずの李碧華が登場して自らの心境を語らなかったが、そもそも李碧華は作家デビュー以来現在に至るまで公的な場に顔を出すことを堅く拒んでいるのである。製作後は「映画の成功と相まって、原作は英訳（米・ウィリアム・モロー社）、邦訳（早川書房）をはじめ各国語に続々と翻訳されている…さらに、（李碧華は）毛沢東夫人・江青の物語をフィクションとして書く計画があり、これも陳凱歌が映画化する予定」であったという。結局毛夫人物語の映画化の計画は実現しなかったが、これは若し李が『霸王別姫』の映画化に際し陳と意見が噛み合わず不愉快な思いをしていたとすると、再びコンビを組む気にならなかったのだろう。

2.2 蝶衣の死

香港問題に関してはすでに多く論じられてきたので、本論では、小説にはなかった映画における蝶衣の死の必然性をめぐり、このように改編した陳凱歌の女性観と、陳凱歌が受けた魯迅的悲劇観の影響、および日本人観客がこれをどう見ているかについて論じていきたい。

2.2.1 日中女性像「蝶々夫人」

プッチーニ作曲のドラマチックなオペラとして知られる『蝶々夫人』は、長崎を舞台に没落藩士令嬢の蝶々さんとアメリカ海軍士官ピンカートンとの悲恋を描いている。物語は、アメリカの弁護士ジョン・ルーサー・ロングが1898年にアメリカのセンチュリー・マガジン1月号に発表した短編

小説『Madame Butterfly』を原作とし、アメリカの劇作家デーヴィッド・ベラスコが製作した戯曲を舞台台本化したものである。

村上由見子『イエロー・フェイス』（朝日選書）によれば、ハリウッド映画は東洋の女性を男に尽くす蝶々夫人と悪女ドラゴンレディーとの二つのタイプとで延々と描き続けてきたという。藤井省三は蝶衣がプッチーニのオペラ『蝶々夫人』のヒロインよろしく自殺する映画版独特の結末は日本や欧米の観客が喜ぶステレオタイプ中国人像にすり寄る改編と言わざるを得ないと指摘している¹⁸。なおオペラ『蝶々夫人』では、蝶々夫人は結婚式の後に愛する夫ピンカートンに自分は前日愛する人と同じキリスト教に改宗したと打ち明けた。だが実際は改宗したことで彼女はその叔父に激怒され呪われる。しかし、キリスト教の教えでは自殺は認められないので、蝶々夫人の自殺はキリスト教に対する裏切りなのである。

『もう一人の蝶々夫人：長崎グラバー邸の女主人ツル』¹⁹によると、蝶々夫人物語の原型となった実在の日本人女性がいるという。その女性の子孫について、『毎日新聞』に以下のような記事がある。

「曾々祖母がグラバーの妻で、『蝶々夫人』のモデルだったかもしれないと私が知ったのは、成人してからでした」。暁星国際学園（千葉県木更津市）の理事長秘書を務める野田和子さんは、そう振り返る…（中略）子孫として野田さんがうれしかったのは、ツルとグラバーが信頼し合って添い遂げたと確認できたこと。悲劇的な最期を遂げた蝶々さんとは対照的だが、「愛を貫いた強い明治女性ツルの像は、確かに蝶々さんに反映されていると私は思います」と、野田さんは言う。²⁰

一方、蝶々夫人に特別なモデルはいない、ただ創作上の人物にすぎないという説もある。しかし、この蝶々夫人のモデルかもしれない女性ツルが、実際に外国人の夫に捨てられたこともなければ、自殺もしなかったにもかかわらず、小説、戯曲、台本において、蝶々夫人が自殺している点は興味深い。原作小説では死なず、しかし映画では自刃するという『さらば、わが愛』のヒロイン蝶衣をめぐる改編と一致するからである。ちなみに、『毎

日新聞』記事は、以下のように続く。

ソプラノの第一人者、松本美和子さんにとって、蝶々さんは当たり役。しかし海外での舞台が多く、日本で全幕を演じるのは、今回の新国立劇場での公演が初めてだ。「欧米ではひたすら、かれんにはかなげにと要求されます。西洋から見た日本女性の理想なのでしょうね」。しかし今回、演出家の栗山昌良さんには「武士道を貫くしんの強さ」を前面に打ち出すよう、求められている。

蝶々さんと蝶衣とは、死によって自分の誇りと深い愛とを表す点で一致している。オペラ俳優の松本が欧米で可憐に演じるようにと要求されているように、陳凱歌も欧米人観客の趣向にすり寄って、原作は死なない蝶衣を映画で「死なせた」という可能性が十分考えられよう。

2.2.2 陳凱歌の女性観

木谷富士子は論文「陳凱歌映画におけるホモソーシャル考 — 男たちの幼児性と母性の神話」のなかで「陳凱歌の作品を見ていくと、いわゆる一般的な女性ヒロインが登場しないということに気が付く。これは同じく第五世代の代表的監督である張芸謀や田壮壮らが女性を描いた作品をとっているのに対し、まったく対照的ともいえる」²¹と指摘し、陳作品に登場する女性の役割を以下のように分類した：

その一、異常な三角関係：『花の影』（1995年）、『キリングミーソフトリー』（2001年）

その二、男性が主人公で、女性がほとんどストーリーに関係しない：『大閼兵』（1985年）、『子供たちの王様』（1987年）

その三、女性が登場してもストーリーは男性の物語で、女性は邪魔者であるか、最終的には排除されてしまったりするものがほとんどである：『黄色い大地』（1984年）、『人生は琴の弦のように』（1991年）、『さらば、わが愛 覇王別姫』、『始皇帝暗殺』（1996年）、『北京バイオリン』

『さらば、わが愛 覇王別姫』は、「その三」に分類され、「女性が邪魔

者で最終的に排除されてしまう」、ここでいう女性とは言うまでもなく、菊仙だけでなく蝶衣も含んでいる。ところで、注意を喚起すべきは、小説に登場したが映画には登場しない女性がいることである。ここで、1985年版小説と映画に登場した女性人物を登場順に並べて比較してみよう。

表4：1985年版小説と映画に登場した女性人物

	蝶衣の母親	師匠の奥さん	女の子の赤ん坊	菊仙	蝶衣の奥さん
小説	夫に死なれた貧しい婦人	稽古の監督役を担いながら日常生活の世話を焼き、子供たちに小銭を渡す等の優しい性格	蝶衣の出世以前に一回のみ登場する。蝶衣は彼女を救えなかった。	娼婦。小楼と正式には結婚せずに同棲。文革中に失踪。	茶葉店店員。上司の紹介により結婚。
映画	娼婦（蝶衣の父親は不明）	登場せず	蝶衣の初舞台後に登場する、男の子の赤ん坊。蝶衣に救われて小四となるが、文革が始まると、真先に蝶衣たちを裏切った。	娼婦。強気で知的、度胸が有る。小楼と「訂婚」を経て結婚し、文革中に自殺。	登場せず

1988年のカンヌ映画祭で、プロデューサーの徐楓が陳監督に『覇王別姫』の話を持ち込んだ当初、陳は「菊仙がとても弱い存在」、「時代背景がはつきりされていない」などを理由に「二年ほど考えさせてください」と言い、すぐには承諾しなかったという²²。確かに1985年版の菊仙は旧時代の弱々しい娼婦であるが、映画の彼女は同じく娼婦の身分でありながらも、知的で自我が確立しており、非常に強気で度胸がある新時代風の女性に見える。陳凱歌は「彼には母親が、それも娼婦の母親がいるべきだ」、「彼はそうした母親に捨てられた経験の持ち主だからこそ、後に娼婦の菊仙が段の恋人として自分の前に現れたとき、彼女に対して本能的な敵意を抱くことになる」と考えて²³、映画は蝶衣の母親に全く異なる人物像を付与した。菊仙と蝶衣の母親の描写の違いに蝶衣の死がどう影響しているかについては、

飯塚敦子の『『霸王別姫』論 — 小説と映画を比較して —』に詳しい分析があるので、ここでは省略する。むしろ注目したいのは、小説の映画版と1992年版に登場しない1985年版小説に描かれた京劇団師匠の奥さんの存在である。映画版では京劇養成所は、女性不在の男性主導の世界として描かれている。小説の中の師匠の奥さんは日頃子供たちの稽古の監督役を担うと同時に、日常生活の世話を焼き、子供たちに小遣いを渡すという極めて優しい母親のような存在である。彼女の存在によって、蝶衣は実母から受けられなかった母性愛を享受することが可能になり、蝶衣人格変化に大きな影響を及ぼしたと考えられよう。

2.2.3 陳凱歌の悲劇観

自伝『私の紅衛兵時代——ある映画監督の青春』²⁴は、魯迅の言葉が直接引用されている²⁵他、文体も模倣しており²⁶、陳凱歌は魯迅に深く影響されていると言えよう。実際に、陳凱歌作品における魯迅の影響は他の研究者も指摘している。たとえば、四方田犬彦は著書『アジア映画』で以下のように述べている。

陳凱歌の作風はときに晦渋であり、毀誉褒貶を巻き起こしたりもするが、彼が一貫して魯迅の説いた「希望と絶望」の弁証法を念頭に取り続けていることには、疑いが無い。²⁷

また上野昂志が、『子供たちの王様』には陳凱歌自身の文革中の雲南省下放経験が反映されつつ、魯迅的文化批判も提示されたと指摘する。

初期魯迅の個人主義的な社会批判に強く惹かれているらしい陳凱歌が、論理として、そのような観念に逃げ込むはずはないと思うが、中国の大地に目覚めるところから始まった彼の映画の歩みが、いわゆる哲学的な色合いを帯びるにつれて、そうなっていく危険がないとはいえない。²⁸

このように、陳凱歌が女性の死という設定を多用するのは、魯迅の「悲劇とは人生の価値あるものを壊滅させてみせることである」²⁹という言葉

と関係していると考えられよう。蝶衣は愛のために死んだというより、文革によって死へと追いやられたと陳凱歌は考えているのであろう。文革による深い心傷を背負い続けていると称する陳監督は、蝶衣の死によって文革の理不尽と罪惡を訴えているのである。常に中国社会の病根を考え、民族の十字架を背負っている陳凱歌が繰り返し文革を取り上げて問題とするのは、文革は中国人の文化的伝統や民族気質における長所と短所とをすべて表しており、たんなる政治運動ではなかったからである³⁰。陳凱歌が中国の文化状況を憂慮している姿と、20世紀前半に国民性批判を行っていた魯迅の姿は重なるようである。

第3章 映画『さらば、わが愛 霸王別姫』の日本における受容

3.1 映画『さらば、わが愛 霸王別姫』の日本における 受賞歴は以下の通りである。

- ・1994年日本映画ペンクラブ邦洋画ベストワン³¹
- ・1994年第49回毎日映画コンクール³²外国映画ファン賞³³
- ・1994年第49回毎日映画コンクール外国映画ベストワン賞³⁴
- ・洋画雑誌『スクリーン』1994年度洋画ベストテン³⁵
- ・キネマ旬報1994年度外国映画ベストテン³⁶
- ・1994年山口県萩市第一回 HAGI 世界芸術祭「アジア・シネマ・ウィーク」
芸術祭大賞³⁷
- ・1980～90年代に日本で公開された単館系の話題作³⁹

このうちの毎日映画コンクール外国映画ベストワン賞の受賞理由に関し、当時の新聞に以下のような批評が掲載されている。

四面楚歌の故事にもとづく「霸王別姫」は京劇の名曲とされるが、これを演じるべく運命づけられた男役と女役の、二人の男を中心に、その過酷な修業時代から絢爛たる舞台を重ねる間の半世紀以上にわたり、二人をめぐる愛や裏切り、恋愛や結婚、さらには国民政府、占領日本軍、人民共和国、文革期、その後へと変転めまぐるしかった時代を背景に、

舞台俳優を生きる情熱と苦悩を物語る。近年力強く前進する中国映画の第一線に立つ陳凱歌監督が力量を発揮し、中国、香港、台湾に製作陣容を広げた気宇壮大な力作である。⁴⁰

そのほか、日本において『さらば、わが愛 覇王別姫』が特別視されている例として以下の二点が挙げられる。

その一『毎日新聞』(1994)：東京・渋谷文化村ル・シネマ2では、五周年を記念して最も愛された作品5本を23日から来年1月27日まで週替わりで連続上映する。23日～31日。⁴¹

その二『読売新聞』(2007)：2008年に開局55周年を迎える日本テレビは東山紀之主演・蜷川幸雄演出の音楽劇「さらば、わが愛 覇王別姫」(3月)などの事業も展開する予定だ。⁴²

3.2 日本における主な上映

3.2.1 1994年一般劇場公開

同作は、1994年2月11日の一般劇場公開に先立ち、1993年9月25日に東京国際映画祭で招待作品として披露されている。この特別上映の前売り券⁴³は完売し⁴⁴、上映当時の好調ぶりは「人気は抜群であった。上映時間二時間五十八(まま)分。波乱に満ちた壮大なスケールの抒情詩にだれもが圧倒され、映像美に酔い、映画が終わっても席を立つものがいなかった」⁴⁵という言葉に表れている。

表5：1994年一般公開主要劇場動員数⁴⁶

劇場名	期間	日数	週間	動員
ル・シネマ1	2/11～8/19	190	27+1 ⁴⁷	66,296
ル・シネマ2	2/11～3/25	43	6+1	16,254
	4/19～7/8	71	10+1	13,852
三越劇場	4/2～5/13	42	6	14,764
京都朝日シネマ2	4/2～6/22	82	11+5	9,518
abシネマ	4/9～5/20	42	6	6,466

パラダイスシネマ	5/14 ～ 7/11	49	7	8,202
ゴールド劇場	4/2 ～ 6/3	63	9	9,006
シネマプラザ 50	6/4 ～ 6/24	21	3	916
KBC シネマ天神	3/19 ～ 5/27	70	10	7,986
札幌ポラスター	3/12 ～ 4/29	49	7	5,058
10 館合計		722	110	158,318

同作はル・シネマだけで 43 週間上映され、さらに文化村ル・シネマで当時の番組編成担当者としていた中村由紀子によれば、このときは観衆の単館作品への関心が高く、当初から強気にも 15 週程度は上映する予定だったという⁴⁸。また、京都朝日シネマ 2 も 5 週間の追加上映を行い、全体的に当初の上映予定を大幅に上回ったことになる。ちなみに、1980 年代に日本で話題となった中国映画『芙蓉鎮』⁴⁹と『紅いコーリャン』⁵⁰はそれぞれ 20 週、24 週⁵¹の上映だったことと比べても、合計 110 週というロングランは破格の盛況ぶりを示している。

3.2.2 2003 年、2004 年レスリー・チャン追悼記念上映

2003 年 4 月 1 日、蝶衣を演じた香港の人気俳優・歌手のレスリー・チャンが香港島中心部のマンダリン・オリエンタルホテルで飛び降り自殺した。このニュースを日本のメディアはその翌日に大きく報道している。そのなかで、『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』はそれぞれ「レスリー・チャンさん自殺 香港の俳優、転落」⁵²、「レスリー・チャンさん自殺 香港の人気俳優・歌手 46 歳、ホテルから飛び降り」⁵³、「俳優のレスリー・チャンさん自殺ー香港・ホテルから転落」⁵⁴というタイトルの記事を書き、ファンの悲しみを報じた。同年 4 月 19 日からは、東京武蔵野館で「追悼レスリー・チャン ～あなたを忘れない～フォーエバー レスリー」という記念上映会が開催され⁵⁵、それを皮切りに、日本全国でレスリー記念上映会が盛んに開かれた。追悼上映会の会場には「感想ノート」⁵⁶が置かれ、寄せられた多くの感想から当時の状況を辿ることができる。たとえば、「当初の予定では上映期間 3 週間だったのが、1 週目にして上映期間 1 週間延長がすぐに決定。平日こそ入場者が劇場の半分（とは言っても、

100名ほどの入場者あり）という日もありましたが、少しでも観やすい席で堪能したいと、開場の1時間以上も前から列ができる日が毎日続き、土日にはほぼ満席、GW中には立ち見の方がでる日もあるほどの盛況ぶりでした」という証言があり、大阪の梅田ガーデンシネマ支配人・松本藤子も「今はなきパラダイスシネマ時代から、レスリー作品には大変お世話になったこともあり、今回は僭越ながらご恩返しの気持ちを込めていち早く追悼特集上映を組ませて頂きました。急な上映にもかかわらず、レスリーを愛するファンの皆様にお越し頂き、心温まる上映会が実施できたことを心より嬉しく思っております」と語っている。

以上のように、レスリー・チャン人気は日本における『さらば、わが愛 霸王別姫』の普及に大きな役割を果たしていた。またこの追悼上映会の盛況ぶりから、同作の日本におけるレスリー人気による受容の一樣相がみえてくるだろう。

3.3 日本での舞台化

2008年に日本テレビ開局55周年を記念したイベントの一環として、日本テレビと文化村は共同して映画『さらば、わが愛 霸王別姫』のミュージカル化を企画した。同作は世界で初めて舞台化された⁵⁷。

スタッフ：

脚本：岸田理生⁵⁸。

演出：蜷川幸雄。

主催：日本テレビ、文化村。

キャスト：東山紀之（蝶衣）、遠藤憲一（小楼）、木村佳乃（菊仙）。

2008年3月9日～31日：東京・渋谷文化村シアターコクーン。

2008年4月5日～13日：大阪・梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ。

3.4.1 舞台化に向けて

残念なことに筆者は同舞台の映像は未見であるが、当時の状況を考察するにあたり、まずは舞台関係者の話を見ていきたい。

蜷川幸雄：5年前にヒガシ（東山）と何かやろうという話になった時、

彼が女形をやってみたいと言ったんです。その中で浮上したのがこの作品。木村(佳乃)さん、遠藤(憲一)さんと理想のキャストがそろいました。⁵⁹

東山紀之：念願の役、念願の作品です…(中略)40代でやるのはこれしかないと思いました。女形がやりたかったというのがありますが、それよりもこの役にすごく惹かれました。僕ら俳優は役を通して人生を学ぶので、この役からもさまざまなことを学びたいと思います。⁶⁰ 蜷川さんから『覇王別姫』はどうだ、と提案され、ぜひやりたいと答えました…(中略)蝶衣は歴史に翻弄され、人としての楽しみを経験できませんが、その生き方は感銘を与えます。レスリーとは昔、ハワイの音楽祭で知り合い、香港で食事したことも。よく知っていたので、『覇王別姫』を演じることに運命的な出会いを感じます⁶¹

木村佳乃：すごく好きな映画なので、出演できてとても嬉しいです。難しい役なのでプレッシャーも感じますが、全力で頑張ります。⁶²

主演キャストの東山紀之と木村佳乃がどちらも原作映画を気に入っていたことから、演ずるにあたり映画を意識していたと想像するに難しくない。特に東山はレスリーの演技を徹底的に研究し、女形特有の動きやしぐさを学んだという。「レスリーの世界観を壊さないように、役作りを積み重ねた。もし、彼が生きていれば見てもらいたかった」と彼はレスリー・チャンの早すぎる死を惜しむ⁶³。ちなみに主演の二人は2009年に恋愛関係を報道されており⁶⁴、2010年10月⁶⁵には結婚に至っている。同舞台で出会い、互いの仕事に対する真摯な姿に引かれ交際を始めた二人にとって、この作品は意味深いものだったに違いない。

3.3.1 舞台化の反響

筆者による文化村への問い合わせによると、舞台の興行は成功を収めたという。原作映画『さらば、わが愛 覇王別姫』の影響、演出家の蜷川幸雄と日本芸能界大スターの東山紀之というコンビ及び日本テレビの宣伝力

を考慮するだけでも、それは十分に予想できよう。だが、果たしてこの舞台は芸術としても高い評価を得たのか。まずは当時の新聞における評論を見てみよう。

流麗な歌で紡ぎ出す夢物語といった趣で、全体に淡い色調を帯びている。現実感の乏しい日本で、中国の史実を描くことへの配慮でもあろうが、叙事詩としてのスケールの大きさや迫力は失われ、もの足りなさも感じた。(中略) 劇中劇の京劇や壮大な中国史と、日本的な詩情に包まれた歌詞、旋律との隔たりが、最後まで違和感を残した。⁶⁶

この記事によれば、舞台は芸術的成功を収めておらず、「失敗」の主な理由は、日本で中国の史実を描いたその現実感が乏しいこと、少年時代の描写が大幅にカットされたことで蝶衣と小樓の絆が希薄になってしまったからであるという。主人公の少年時代がカットされた理由は、日本で京劇を演じられる少年役を見つけること難しかったからと考えられる。ちなみに、日本の漫画家の高橋留美子⁶⁷はデビュー 30 周年を迎えた 2008 年に『読売新聞』の取材を受け、「最近のお気に入り」を 10 点挙げるようと言われ、映画『さらば、わが愛 覇王別姫』の名を出した。彼女は「最近観た舞台では出色。主演の東山紀之さん、蜷川幸雄さんの演出がすごく良かったです」⁶⁸と評価している。

3.4 『さらば、わが愛』に関する出版物

表 6：『さらば、わが愛』に関する出版物

書名	類別	出版社	刊行年月	作者	訳者	その他
『さらば、わが愛』	小説	早川書房	1993 年 11 月	李碧華	田中昌太郎	1994 年 2 月の同名映画化作品の日本公開に合わせた出版である。2012 年 6 月までに、第三刷を刊行、累計 70,000 部である。

『さらば、わが愛 霸王別姫』——中国語・日本語対訳シナリオ集』	シナリオ	キネマ旬報	1996年5月	陳凱歌	水野衛子	5、6年ごとに重版され、2007年5月に3刷まで増刷、2012年6月までに累計製作部数は10,000部前後。
---------------------------------	------	-------	---------	-----	------	--

小説『さらば、わが愛』発行部数が70,000部であったことと比べると、シナリオの10,000部は一見少ないように思う。しかし、シナリオの読者は映画『さらば、わが愛 霸王別姫』の熱烈なファンであると同時に、上級中国語の学力⁶⁹が要求されることを考えると、10,000部という数には重みがあるろう。

3.5 同作により人生が変わった日本人たち

新聞記事より例を三つ上げてみよう：

その一：高校3年の卒業間近、初めて中国映画「霸王別姫」を見て、米ハリウッド映画とは違う奥深さに魅せられた。「中国映画に出演したい」。99年3月、卒業式の4日後、単身北京に渡った。大学で一から中国語を学び、中国映画界の登竜門といわれる北京映画学院演劇科を目指した。⁷⁰

その二：書道を極めたいと中国文学を専攻したが、「異文化への拒否反応で、どうしても中国を好きになれなかった」。篆刻でも、日本の作家、作風を好んだ。転機になったのは、大学2年。テレビで偶然見た香港・中国映画「さらば、わが愛／霸王別姫」だ。俳優たちの卓越した演技と美しさを眺めるうち、中国への意識が変わった。⁷¹

その三：人気グループ「少年隊」のメンバーで俳優の東山紀之さんと女優の木村佳乃さんが23日、婚姻届を出した。…（中略）2年前に東

山さんが主演した舞台『さらば、わが愛 霸王別姫』で共演して交際が始まった。⁷²

この他、インターネットのブログや掲示板などでも映画『さらば、わが愛 霸王別姫』について、「日本公開時にはすでに学生ではなかったけど、もし学生時代にこの映画に出逢っていたら、ものすごくのめりこみ過ぎて卒論の題材にもしたことだろう⁷³」、「映画を観始める切っ掛けになった映画。観るたびに泣けてくる（わたしにとっては）希有な映画」⁷⁴という発言が見られ、同作が彼らにとって、いかに特別な存在であったかが読み取れる。また実際に、筆者の日本人の知人のあいだでも、映画『霸王別姫』により人生が変わったと語るものは多く、彼らは同作に惚れ中国語を学習しはじめ、中国関係の仕事や研究に携わるようになったと話す。

第4章 日本に受け入れられる理由

4.1 陳凱歌@日本

1993年、神戸国際インディペンデント映画祭の審査委員長に陳凱歌が招聘された。その理由は「陳さんは今年カンヌ映画祭でグランプリを受賞、映画人として今、世界で最も注目されている」からで、「審査委員長には映画祭実行委員会の強い要望で受賞前から決まっていた」という⁷⁵。また、2002年に『読売新聞』は連載「文明を問う 21世紀を生き抜く知恵」を組み、世界有識者14人⁷⁶の「知恵談」を載せた。そのなかで唯一の映画監督が陳凱歌である。さらに、2006年には立命館大学映像学部の客員教授として、陳凱歌が招かれた⁷⁷。これらは日本における陳凱歌の影響力の大きさを雄弁に物語っている。

4.2 レスリー・チャン@日本

すでに述べたが、蝶衣役のレスリー・チャンは『男たちの挽歌』や『チャイニーズ・ゴースト・ストーリー』などの映画で、日本でお馴染みの香港

スターである。当時、「東京の映画館には、張国榮のファンらしき若い女性を数多く見かけたが、東京国際映画祭の特別上映で、彼の舞台挨拶を待って十時間も前から行列を作っていた少女たちの熱気には、やはり宝塚に近いものがあるように思える」⁷⁸ というように、日本における同作の主な観客が女性であったことは、映画『さらば、わが愛』が受容される際レスリー・チャンが果たした役割の大きさを示している。

2007年にはレスリー・チャン国際ファン連盟日本支部 RED MISSION japan による『『覇王別姫』・芸術展』が神奈川県民ホールギャラリーで開かれた。詳細は以下のようだ⁷⁹。

表 7:『『覇王別姫』・芸術展』の詳細

期間	2007 年 12 月 20 日～2007 年 12 月 23 日（4 日間）
会場	五つの展示室全部使用。
収入	3,612,322 円（カンパ:914,322 円、記念品売り上げ:2,698,000 円）

これは入場料無料のボランティアイベントであり、「レスリー・チャン（張國榮）の主演した国際的評価の高い最高の中国映画作品『さらば、わが愛 覇王別姫』を日本において次世代へと世界へと伝え広めるために、中国の京劇文化を紹介するために、中国の歴史に対する理解を深めるために」⁸⁰ 開かれ、ファン以外にも幅広い支持を得て大好評を博した。

実際、レスリー・チャン出演作のほとんどが日本で公開されている。にもかかわらず、特に『覇王別姫』を取り上げ芸術展のタイトルとしたのも、日本における同作の認知度の高さに起因しているだろう。ちなみにこの芸術展は同年、「日中文化・スポーツ交流年」実行委員会より「日中交流に貢献してくれてありがとう」という内容の感謝状をもらっている。

4.3 中国伝統文化・芸術への関心

以下は 1994 年 12 月の『毎日新聞』掲載のクイズ問題である：

Q. 中国の伝統演劇「京劇」が日本で新たな人気を呼んでいる。きっかけとなったのはある中国映画。京劇役者 2 人を主人公にしたその映画は？

A. 『菊豆』

B. 『黄色い大地』

C. 『息子の告発』

D. 『さらばわが愛 霸王別姫』

◇正解◇

D 陳凱歌監督の作品で、昨年のカンヌ映画祭グランプリを受賞した。日本でも若い女性客を中心に大ヒットした。⁸¹

これは映画『さらば、わが愛 霸王別姫』の上映後、日本で京劇ブームが起こったことを物語っている。当時の記事を見ると、

中国文化を代表する伝統演劇、京劇が今年、日本で新たな視点から人氣を博した。京劇を舞台に激動の現代中国史を描きカンヌ映画祭グランプリ賞を受賞した「さらば、わが愛—霸王別姫」(陳凱歌監督)が上映され、若い女性客を中心に大ヒットしたのである。⁸²

「霸王別姫」は、京劇を代表する名女形・梅蘭芳(1961年没)が得意とした演目。93年カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した陳凱歌監督の映画「さらば、わが愛～霸王別姫」の大ヒットにより、日本でも一躍関心が集まった。⁸³

中国伝統の京劇が、日本でもじわじわとファンを広げている。「全国で4万～5万人というところか。大半は女性。京劇俳優の運命を描いた映画『さらば、わが愛／霸王別姫』が日本で公開された94年以後、大幅に増えた」と、86年以来、京劇団の招聘(しょうへい)を続けている津田忠彦プロデューサーは話す。⁸⁴

ここから、同作の京劇というテーマが日本人観客に足を運ばせた理由の一つだとわかる。映画評論家の淀川長治はこの点に関し、「おまけに京劇が出てくるから、娯楽があるの。(中略)京劇の裏側を見せてくれて、とても興味深かった」⁸⁵と言い、確かに一度でも京劇を見た人はこの2時間52分は目に沁みこむであろう。中国の京劇は日本でいう歌舞伎のような伝統的舞台芸術で、派手な衣装と化粧、そして独特の演技法とその発生過程に特徴がある。人氣のある主要演目は歴史を題材としたものが多く、『霸王別姫』はその代表的例である。京劇『霸王別姫』は、司馬遼太郎『項羽

と劉邦』を読むことで理解でき、また夏目漱石『虞美人草』に因んで知られている⁸⁶。筆者が映画評論家の佐藤忠男になぜ日本人は映画『さらば、わが愛 霸王別姫』を見に行くのかと質問したところ、中国の伝統文化特に京劇に興味を持っているので、京劇俳優の話であるならば是非見に行きたいと思うから、という答えが返ってきた⁸⁷。中国独自の映画が世界に向かって語ると、優れた民族文化が国際化に通じ、中国人が自己文化に対する誇りを十分に発揮したことに、日本人が圧倒されたと言えよう。

4.4 日本メディアの「中国で上映禁止」報道

『さらば、わが愛 霸王別姫』は中国国内で上映禁止とされた。これに対する日本の新聞報道を、時系列順に見ていきたい。

（『読売新聞』1993年6月22日）先月の第四十六回カンヌ国際映画祭で最高賞を獲得した中国の陳凱歌監督作品『さらば、わが愛 霸王別姫』が、中国では上映されないことになった。映画関係者らによると、文芸のお目付け役機関である中国共産党宣伝部（部長・丁関根政治局員）がこのほど、同性愛的色彩が見られるとして、上映禁止措置を決めたという。⁸⁸

（『読売新聞』1993年8月4日）日中戦争から国共内戦、さらに文化大革命と、激動の時代を生き抜いた二人の京劇男優と一人の妓女の三角形ラブストーリーのこの映画に対し、文芸のお目付け機関である党宣伝部などが、同性愛的描写があることなどを理由に上映に反対した。⁸⁹

（『毎日新聞』1994年7月7日）新鮮な感覚で世界中から高い評価を受けている中国映画が、危機に直面している。…（中略）中国が昨年製作した映画百五十四本のうち、五十四本が香港や台湾など大陸外の資本との合作。こうした盛況ぶりが、当局に危機意識を与えたようだ。⁹⁰

『読売新聞』では、同作が文革および京劇俳優の同性愛を描いた点に上

映禁止の理由があるとし、これがほぼ定説とされる⁹¹。一方で『毎日新聞』は、同作の制作形式、つまり香港と台湾の提携に中国当局が危機意識持ったからだと解釈し、同様の見解は他でも見られる⁹²。だが、154本中の54本が大陸外の資本との合作映画ならば、兩岸三地の提携に危機を覚えたからといって上映禁止としては、その三分の二しか上映できない。これにより合資映画の資本回収が難しくなるのは必須だが、果たしてこうした対策で自国の映画事業を救えるだろうか。

陳凱歌はかつて狂喜乱舞したことがある。それは1992年12月21日深夜、東京・調布の東京現像所寄宿舍で、北京からの国際電話が『さらば、わが愛 覇王別姫』に中国国内上映許可が下りたと彼に伝えた瞬間である⁹³。事実、同作は中国国内の劇場で一般上映された⁹⁴。だが、こうした日本メディアによる「上映禁止」報道を、資本主義の社会主義に対する攻撃であるなどと単純に論じることにはできない。中国映画評論における第一人者・戴錦華は以下のように述べている。

どうやら、「中国映画」を評価する重要な要素は、作品の芸術的文化的質ではなく（当然「質」の評価基準の設定自体が検討の対象に成り得るが）、作品とその製作者の中国政府との相対関係であるように見える。…（中略）「禁じられた」（審査を通過していない）作品が、さらには体制外で製作された中国映画を国際映画祭のコンテスト部門で入賞させる → 政府の許可を得ずに国際映画祭で入賞した作品を上映禁止にする → 禁止を受けた中国映画人を特別に重視し、一層褒め称える。…（後略）⁹⁵

とはいえ同作は、香港を代表する人気男優レスリー・チャンや国際女優の仲間入りを果たしているコン・リーの出演に加え、中国現代史、中国伝統文化の京劇及び俳優の同性愛を描いた、壮大かつ華麗なストーリーにまぎれず観賞価値があろう。さらに、カンヌ国際映画祭のグランプリ受賞という、国際的評価にもかかわらず、本土で上映禁止とされたことが、日本人観客の好奇心を煽ったといえる。

4.5 分かりやすい物語

映画評論家の佐藤忠男は『さらば、わが愛 霸王別姫』の成功理由を次のように分析している。

（『霸王』は）香港で培われてきた華麗なメロドラマ的な映画作法を土台として、ひとつの飛躍を試みたものといえるだろう。さらに言えば通常のメロドラマを超えた、超メロドラマであるといえるかもしれない。⁹⁶

同作をメロドラマだと見る佐藤氏は、そのエンターテインメント性の高さに注目しており、確かに華麗な京劇および、暴力的な文革やレスリーが演じる同性愛は、いずれも話題性に富むテーマである。また、刈間文俊も、同作が素人・玄人ともに楽しめる分かりやすい映画だったことが日本における成功理由だと論じ⁹⁷、同様の指摘をした映画評論は多い⁹⁸。一方、それまでの他の中国映画も「人生訓話みたい、オヤジの説教みたい」⁹⁹と言われるように、映像によって哲学的なテーマを展開しようとし、結局空回りすることがある。実のところ、映画『さらば、わが愛 霸王別姫』には複数のバージョンがあった¹⁰⁰。下記の通りである。

表 9：映画『さらば、わが愛 霸王別姫』のバージョン

地域	特徴
日本	オリジナル国際版
香港、台湾	いわゆる「港台版」、『愛はもう過去のこと』 ¹⁰¹ という主題歌がラストに追加される。やや叙情的な印象が強い
アメリカ	京劇などのシーンが 20 分ほどカットされた ¹⁰²
イギリス、北欧、韓国	人物描写が単純化されてわかりやすくなった。やや薄っぺらな印象
中国大陸	文革のシーンなどにクレームを付けられたので、「港台版」を一部カット

刈間文俊が「さすが香港・台湾の商業映画資本が投資した作品だけのことはある」¹⁰³と感心しているように、この数のバージョンを用意したのは、配給側の意向によるものだと考えられる。そして、日本上映版がオリジナ

ル国際版であったことに注目したい。一方で同じ東アジア圏の韓国では、「人物描写が単純化されてわかりやすい」バージョンが使用された。ここで日韓両国の中国文化に対する理解度や映画観客の質を比較するつもりはないが、想起されたいのは、日中両国に共有された「蝶々夫人」の物語である。19世紀の日本人女性「蝶々夫人」に類似したヒロインを20世紀の中国京劇女形の蝶衣が演じるという文化共有性によって、日本人は映画『さらば、わが愛 霸王別姫』をほぼ全面的に受け入れることができたのだろう。

4.6 日中友好との相互作用

4.6.1 日本軍に対する好意的描写

映画『さらば、わが愛 霸王別姫』は中国現代史を描く大河ドラマであり、必然的に日中戦争および日本軍が描写される。映画では、政権交代のたびに勝者側の兵士が京劇を見に来る。各政権兵士の鑑賞態度の描写は下記のように比較できよう¹⁰⁴。

表 10：映画『さらば、わが愛 霸王別姫』の兵士に対する描写

	場所	当時の状況	描写	結果
傀儡軍	京劇 楽屋	小楼が芝居の衣装を着ようとする	日本傀儡軍兵士が衣装を奪い、日本兵に着せかける。	小楼が捕まえられる
		小楼が服を返せと要求する	「なんだと？ たかが芝居の衣装じゃないか。たとえおまえのお婆さんの経帷子だろうが、おとなしく脱げばいいだ。わかったか。河原乞食め」と言い放つ	
日本軍	京劇 劇場	蝶衣が演技をする	青木が立ち上がる。手袋を外して拍手する。	小楼を無事救出
	日本軍 司令部	小楼を救出するために蝶衣が演技をする	青木一同が整然と畳に座り、京劇鑑賞。手袋をつけて拍手する。	

国民党軍	京劇劇場	蝶衣が演技をする	鑑賞中に兵卒が閑談議論する。舞台下で兵士と負傷兵が舞台を取り囲んで大騒ぎする。舞台下で兵士達が懐中電灯で演技する蝶衣を照らす。	菊仙が流産してしまう。蝶衣が漢奸容疑で連行される
		演技が中断され、小楼が礼儀正しくそれを引きとめる。小楼が「日本人だってこんな真似はしませんでしたよ」と言う。	「日本人を褒めるとは何事だ」と激怒し、兵士たちが手元のブリキの箱を小楼に投げつけ、舞台に上がり小楼を殴る。	
共産党軍	京劇劇場	蝶衣がアヘンで喉を壊し、歌に詰まり、小楼がお詫びする。	突然、拍手が起こる。将校が音頭を取り、兵士たちと革命歌曲を歌い始める。	ハッピーエンド

このように、日本傀儡軍と日本軍、国民党兵士および共産党軍と比べると、その違いは明らかだ。また、蝶衣が傀儡軍に捉えられた小楼を救うため日本軍営に赴き京劇を演じる場面がある。

第 55 幕 日本軍司令部外 春、夜、外

小楼：日本人のために唱ったのか？

蝶衣：青木という人は芝居が分かるんだ。

小楼、ぺっとつばを蝶衣の顔に吐き棄てる。¹⁰⁵

この後、菊仙と小楼が去ってゆく。菊仙は小楼を救出できたら小楼と別れると蝶衣に約束したが、結局別れるどころか、その後間もなく二人は結婚式を上げた。時代が変わり国民党が天下をおさめると、蝶衣は日本軍のために京劇を演じたとして漢奸の罪に問われる。

第 72 幕 春、昼、室内

検察官：日本軍の宴席でみだらな歌曲を演じ、敵方の士気を鼓舞し、

我が方の尊厳を傷つけた。

(中略)

蝶衣：宴会に行きました。私も日本人は憎い。でも彼らは私を打ったりはしなかった。

裁判官：被告人程蝶衣は事実を以って自分の無実を証明する義務と権利を有する。もう一度よく思い出して答えなさい。

蝶衣：青木が生きていたら、京劇は日本へ伝わったことでしょう。私を殺すがいい。¹⁰⁶

このように、蝶衣は民族意識とは関係なく、日本人の青木を京劇よき理解者だと思っているにすぎない。実際映画『さらば、わが愛』における日本軍の登場場面は日本人観客の関心を引いており、ある観衆は「勇気ある映画でもある。国民党軍も共産党軍も4人組も日本軍よりも礼儀が悪いだなんて事を揶揄するとは全くもって勇気がある。どうかこの映画のスタッフ・キャストたちが今後も無事に活躍出来るような将来になってほしい」¹⁰⁷と制作側の身を案じている。また、映画評論においても次のように論じられる。

日本軍占領時代に、蝶衣が日本の将校の求めに応じて演じたことが売国的行為とされ、国民党政府によって裁かれるが、そのとき蝶衣は「日本軍の中にも芸術を理解する者はいた、もし、その将校が生きていたら京劇を日本に伝えたにちがいない」と言い放つ。これまでの中国映画には見れない描き方である。¹⁰⁸

こうした描写の理由について、陳凱歌は以下のように語る。

青木という人物を通して特に当時の日本軍の将校を描こうしたわけではありませんが、当時あつた状況の中でも中国の文化芸術に理解を示した日本の軍人がいたはずだと思うのです。と、同時にあつた状況を描いて程蝶衣という人物を浮き彫りにしたかったのです。本当の役者に

は国家や民族という観念はないのです。京劇を愛する客なら誰だろうと芝居を見せる。程蝶衣というのは、そういう芸術至上主義者です。日本人だから芝居を見せないという、そういう観念は全く持ち合わせていないのです。¹⁰⁹

陳凱歌は人物蝶衣の極端に芸術至上主義的な性格を描くためにこの設定をした。陳があらかじめ日本観客を配慮してこのように描写したとは考えられないというわけではないようである。日本人観客が中国映画で日本人が友好的に描かれたために同作を気に入ったと簡単に結論付けることはできないが、この描写が彼らの注目を集めたことは確かである。また、日中友好の場での上映作品とあれば、残虐な日本軍を強調した中国映画ではなく友好的描写を含むものを選択してもおかしくないであろう。

4.6.2 日中両国の絆による制作

周知のように、中国第五世代と言われる監督のヒット作の多くには、日本の技術スタッフの貢献がある。『さらば、わが愛 霸王別姫』も日中共作映画の一つで、ポストプロダクションは東京・調布現像所で行われていた。

陳凱歌自身、記者会見で「『霸王別姫』が音の面で評価を受けられるのは日本人スタッフのおかげだ」と話し、日本側の録音監督を務めた神保小四郎らの名前を常に挙げている¹¹⁰。これにより神保への評価や信頼は高まり、中国人スタッフのあいだでは「アジアの神保先生」という呼称も定着し始めているという。また、当時日活スタジオセンターで同作の編集に携わった西原昇は2007年のインタビューで「ハリウッドで仕事をするうえで、『霸王別姫』に携わったということですぐに信用されました。この仕事をしたことは、私の人生の転機になったことは事実です」と感激して語った¹¹¹。

このように映画『さらば、わが愛 霸王別姫』は、香港・台湾・中国大陆という中国語圏の人材のみならず、日本人スタッフも含めた東アジアの絆があっちはじめて誕生したといっても過言ではないだろう。

終わりに

本論は映画『さらば、わが愛 霸王別姫』と小説『霸王別姫』を比較し、小説にはなかった映画における蝶衣の自殺の改編をめぐり、そのように改編した陳凱歌の女性観と、陳凱歌が受けた魯迅的悲劇観の影響などを考察し、日中間で共有される女性像「蝶々夫人」を見出した。続いて、同作の上映状況、日本人による同作の舞台化、同作に関する出版物および同作により人生が変わった日本人の証言などを通して、同作の日本における受容状況を明らかにした。最後に、同作が広く日本人観衆に受け入れられた理由は、ゴールデンチーム、京劇のテーマ、分かりやすい語り方、日本メディアの「中国国内での上映禁止」の報道、同作が日中友好交流の好材料などであることを明らかにした。日本人の映画評論には、(少年時代の蝶衣)小豆子の子供時代の修業ぶりに感動する記述など、小豆子に対する関心がよく見られることから、必死に頑張って花開いた蝶衣の芸術的生涯は、勤勉にして芸道を重んじる日本人の性格に合ったからだとも考えられる。一つの国を理解するためにその国の映画を見れば分かれるとよく言われるが、国がどんな映画を受け入れることからその国の国柄も伺えよう。

-
- 1 原題『盜馬賊』、1985年制作、1987年11月21日日本公開、キネマ旬報映画データベースより（公開日に関しては以下同）。
 - 2 原題『藍風箏』、1993年制作、1994年2月26日日本公開。
 - 3 原題『黄土地』、1984年制作、1986年7月11日日本公開。
 - 4 原題『霸王別姫』、1993年制作、1994年2月11日日本公開。
 - 5 原題『紅高粱』、1987年制作、1989年1月27日日本公開。
 - 6 原題『活着』、1994年制作、2002年3月23日日本公開。
 - 7 『お茶の水女子大学中国文学会報 第二十六号』2007年4月。
 - 8 『多元文化』名古屋大学国際言語文化研究科、2009年3月、p141～153。
 - 9 『お茶の水女子大学中国語文学会報 第二十一号』2002年4月、p53～62。
 - 10 シナリオ未見。
 - 11 1988年カンヌ映画祭で陳凱歌と湯臣電影有限公司の徐楓と知り合い、徐が『霸王別姫』製作の企画を持ち込んだ。陳はすぐ承諾せず、1990年イメージが固まった

のち1991年9月に『霸王別姫』の製作チームを成立した。参照：『さらば、わが愛霸王別姫』日本上映時パンフレットおよび鈴木布美子による陳凱歌監督インタビュー（1993年6月15日ヘラルド会議室にて）「映画を撮るときにいちばん興味を感じるのは、人間の本性だ」『キネマ旬報』1994年2月（中華電影世界進出計画--越境する中国語圏映画（チャイニーズ・シネマ）<特集>）p. 20-21。

- 12 「私が監督として撮る以上、脚本には私が考えている内容が盛り込まなければ困る。その意味で、シナリオを作成する段階でも主導権は私にあった。特に李は香港の作家だから、大陸の状況、たとえば京劇の世界やドラマの背景にある中国の社会状況に必ずしも詳しくない。そこで私は、西安撮影所のシナリオライターである蘆葦に参加してくれるよう頼んだ。彼は年齢的に私に近く、当然文化大革命も体験している。しかも京劇の大ファンなので、共同脚本のライターにはぴったりだったね。」同前注、鈴木布美子による陳凱歌監督インタビュー。
- 13 同前注、鈴木布美子による陳凱歌インタビュー。
- 14 小林さつき「李碧華『霸王別姫』に表れた女性観と香港意識」『お茶の水女子大学中国文学会報 第二十号』2001年4月、p. 246。
- 15 水野衛子による陳凱歌インタビュー『中華電影的中国語「さらば、わが愛」中国語・日本語対訳シナリオ集』著者・陳凱歌、役者・水野衛子、キネマ旬報出版、1996年5月15日。p. 24。
- 16 藤井省三「オリエンタリズムへの傾斜 『さらば、わが愛 霸王別姫』」『中国映画：百年を描く、百年を読む』岩波書店、2002年7月、p.75。
- 17 「李碧華原小説は順序發展、一直寫到香港，這太複雜了，根本不可能做。」焦雄屏「談『霸王別姫』(2) 人生也一直換舞台」、『風雲際会——与当代中国電影的對話』、台北・遠流出版有限公司、1998年、p. 112。
- 18 藤井省三「オリエンタリズムへの傾斜 『さらば、わが愛 霸王別姫』」『中国映画：百年を描く、百年を読む』岩波書店、2002年7月、pp.74-75。
- 19 『もう一人の蝶々夫人：長崎グラバー邸の女主人ツル』楠戸義昭著、毎日新聞社、1997年7月。
- 20 「“モデル”の子孫、野田和子さん、プリマドンナと対面——愛を貫いた『蝶々夫人』」『毎日新聞』1998年4月10日、東京朝刊、14頁。
- 21 木谷富士子「陳凱歌映画におけるホモソーシャル考——男たちの幼児性と母性の神話」『お茶の水女子大学中国文学会報 第二十六号』2007年4月、pp.39-40。
- 22 同前注、鈴木布美子による陳凱歌インタビュー。
- 23 同前注、鈴木布美子による陳凱歌インタビュー。
- 24 作者・陳凱歌、訳者・刈間文俊、講談社現代新書、初版1990年6月、2006年6月復刊。作者の後書きによると、同自伝は作者の1989年アメリカに滞在中に書

- かれた。1990年6月日本での初版が世界初公開である。その後、1991年に台湾版、1992年に香港版、2009年に大陸版が出版された。
- 25 例えば、1990年日本版 p.114「集団の尊大」「愛国の尊大」など。「熱風」『随想録 三十八』。
 - 26 例えば、1990年日本版 p.8「特に印象に残っていることが、二つある。一つは夏のことで、もう一つもやはり夏だった」は、明らかに魯迅が1924年9月15日に書いた『野草・秋夜』「在我的后园，可以看见墙外有两株树，一株是枣树，还有一株也是枣树。」を真似ている。
 - 27 四方田犬彦『アジア映画』作品社、2003年2月、p.47。
 - 28 上野昂志「中国映画 作家論 陳凱歌と田壮壮」『アジア映画小事典』佐藤忠男編著、三一書房、1995年12月15日、p.61。
 - 29 「悲劇将人生的有价值的东西毁灭给人看」魯迅『再論雷峰塔的倒掉』、1925年2月23日『語絲』週刊第15期に初掲載。
 - 30 陳凱歌インタビュー「人生は、燃え上がる花火のように」聞き手・羅雪蚩 翻訳・刈間文俊、『世界』岩波書店1994.5 pp.259－260。
 - 31 「羽仁進監督に94年度日本映画ペンクラブ賞」『読売新聞』東京夕刊、1995年1月31日
 - 32 主催＝毎日新聞社、スポーツニッポン新聞社
 - 33 同作は5位で268票を獲得、応募総数は4838票であった。「[特集] 第49回毎日映画コンクール 外国映画ファン賞」『毎日新聞』1995年1月30日、東京朝刊、14頁、特集
 - 34 「[社告] 1994年毎日映画コンクール 日本映画大賞に「全身小説家」」『毎日新聞』1995年1月19日、東京朝刊、3頁、総合。
 - 35 「『スクリーン』が94年度洋画ベストテンを発表」『毎日新聞』1995年1月17日、東京夕刊、7頁、芸能。
 - 36 「キネマ旬報ベスト10決まる」『毎日新聞』1995年1月13日、東京朝刊、26頁、社会
 - 37 同実行委員会主催、朝日新聞社など後援。映画生誕百周年を記念、萩シネクラブなど萩市内の若者グループが企画した。「今夏、萩で第一回「HAGI世界映画芸術祭」【西部】」『朝日新聞』1994年6月28日朝刊参考。
 - 38 「萩芸術祭大賞に中国・香港合作『さらば、わが愛』【西部】」『朝日新聞』1994年8月28日、朝刊。
 - 39 「[追跡] TV・芸能 世界中の映画、見られる日本――ミニシアター相次ぎオープン」『毎日新聞』1999年9月4日、東京朝刊、25頁、総合。
 - 40 「[特集] 第49回毎日映画コンクール 外国映画ベストワン賞」『毎日新聞』1995

年1月30日、東京朝刊、14頁、特集。

- 41 「ル・シネマ、ベスト5を連続上映ー渋谷文化村ル・シネマ2」『毎日新聞』1994年12月14日、東京夕刊、7頁、芸能。また、筆者がル・シネマ支配人江熊裕一に電話インタビューしたところ、同作は当社創業以来、最初に扱ったアジア映画で、歴代興行実績で二位と大ヒットした作品だという。「いろんな意味で、我々にとっても特別な作品です」と江熊氏は熱く語っていた。
- 42 「日テレ開局55周年、記念企画を発表 SPドラマや歴史番組など」『読売新聞』2007年12月27日、東京夕刊、11頁。
- 43 前売りが2017枚、当時の入場料が2000円。レスリー・チャン国際ファン連盟日本支部RED MISSION japanによる「『覇王別姫』・芸術展」の資料集を参考。
- 44 「東京国際映画祭が開幕 12の企画で173本上映 アジア作品に高い関心」『読売新聞』東京夕刊、1993年9月25日
- 45 石坂昌三、中国系映画パワー『さらば、わが愛 覇王別姫』『長銀総研L』LTCBR長銀総合研究所、1994年2月、p.52
- 46 ル・シネマの資料、筆者によるル・シネマ支配人への書簡に基づく。その他はレスリー・チャン国際ファン連盟日本支部RED MISSION japanによって「『覇王別姫』・芸術展」の資料集を参考。
- 47 「+」の数字が追加上映。
- 48 同前注、中村由紀子インタビュー。
- 49 原題『芙蓉鎮』、謝晋監督、1987年制作、1988年3月26日日本公開。
- 50 原題『紅高粱』、張芸謀監督、1987年制作、1989年1月27日日本公開。
- 51 同前注刈間文俊・白井啓介・森繁、座談会、pp.13－18。
- 52 『朝日新聞』2003年4月2日、朝刊、1社会。
- 53 『読売新聞』2003年4月2日、東京朝刊、社会、39頁。
- 54 『毎日新聞』2003年4月2日、東京朝刊、社会、31頁。
- 55 「追悼上映・感想ノート活動最終報告」日本レスリー・チャンファンによるサイト「For Leslie Lovers」より http://www.forleslielovers.net/act4leslie/leslie_note_lastreport.html
- 56 日本レスリー・チャンファンによるサイト「For Leslie Lovers」より http://www.forleslielovers.net/act4leslie/leslie_note_lastreport.html
- 57 「音楽劇：『さらば、わが愛 覇王別姫』世界初の舞台化 蜷川幸雄演出、東山紀之主演で」『毎日新聞』2008年3月10日、東京夕刊、5頁、総合面。
- 58 岸田理生（1946年1月3日～2003年6月28日）、劇作家、演出家、シナリオ作家、小説家、翻訳家。蜷川幸雄は、岸田氏が脚本初段のまま亡くなったので、演劇的な肉付けは自分自身でしたという。（「音楽劇：『さらば、わが愛 覇王別姫』

世界初の舞台化 蜷川幸雄演出、東山紀之主演で『毎日新聞』2008年3月10日、東京夕刊、5頁、総合面。)。また、上映まで5年かかった理由について、ある記事(下記のアドレス)は「03年より企画が始動し、実現まで4年余。上演許可を得るため、原作者リー・ピクワの“居所探し”から始まったという一大プロジェクトだ」と説明する。http://www.theaterguide.co.jp/theater_news/2007/11/20_02.php

- 59 http://www.theaterguide.co.jp/theater_news/2007/11/20_02.php
- 60 http://www.theaterguide.co.jp/theater_news/2007/11/20_02.php
- 61 「音楽劇：『さらば、わが愛 覇王別姫』世界初の舞台化 蜷川幸雄演出、東山紀之主演で『毎日新聞』2008年3月10日、東京夕刊、5頁、総合面。
- 62 http://www.theaterguide.co.jp/theater_news/2007/11/20_02.php
- 63 「音楽劇：『さらば、わが愛 覇王別姫』世界初の舞台化 蜷川幸雄演出、東山紀之主演で『毎日新聞』2008年3月10日、東京夕刊、5頁、総合面。
- 64 「朝刊朝日だけが知る東山紀之・木村佳乃二人の熱愛」『朝日新聞』2009年12月11日、東京朝刊。
- 65 「結婚：東山紀之さんと木村佳乃さん」『毎日新聞』2010年10月24日、東京朝刊
- 66 坂成美保「評『さらば、わが愛 覇王別姫』はかなげな女形、東山が好演」『読売新聞』、2008年3月19日、東京夕刊。
- 67 高橋留美子、1957年生まれ、その代表作に『うる星やつら』や『犬夜叉』などがある。
- 68 「[ALL ABOUT] 高橋留美子 次回作、男の子に読んでほしい」『読売新聞』2008年7月9日、東京夕刊、8頁。
- 69 物語舞台は20世紀の北京で、セリフは北京語である。なまりが多い他、伝統文化や中国歴史の知識も備えていないと理解しにくい。
- 70 「ひと：前田知恵さん＝中国映画『北京の恋』に主演した日本人女優」『毎日新聞』2007年9月18日、東京朝刊、3頁、三面。
- 71 「毎日書道展：福田久美子さんに毎日賞 映画転機に、中国への意識が変化 / 栃木」『毎日新聞』2006年7月7日、地方版/栃木、27頁。
- 72 「結婚：東山紀之さんと木村佳乃さん」『毎日新聞』2010年10月24日、東京朝刊、26頁、社会面。
- 73 ブログ「funkin'for HONGKONG」より http://funkin4hk.tea-nifty.com/f4hk_blog/2004/04/1993.html
- 74 サイト「Cinema Scape 映画批評空間」<http://cinema.intercritique.com/comment.cgi?u=679&mid=814>
- 75 「「顔」神戸国際インディペンデント映画祭の審査委員長、中国人監督 陳凱歌さん」『読売新聞』1993年6月12日、大阪朝刊。

- 76 「連載文明を問う 21 隻を生き抜く知恵 これからの登場予定」『読売新聞』2002 年 1 月 3 日～14 日の記事を参考。
- 77 「陳凱歌監督がこの春、立命館大学客員教授に」『朝日新聞』2007 年 1 月 9 日、夕刊。
- 78 刈間文俊「霸王別姫の周辺」『文学』第 6 巻第 2 号、1995 年春、岩波書店、p.174。
- 79 「『霸王別姫』・芸術展」会計報告。<http://ftmc.exblog.jp/7441837/>
- 80 「『霸王別姫』・芸術展」レポート。<http://www.redmission.jp/activities/2007ftmc/mokuteki.htm>
- 81 「[[どーれだ] スティービー・ワンダーの 70 年代の代表曲／京劇役者が主人公の映画]『毎日新聞』1994 年 12 月 14 日、東京夕刊、2 頁、総合。
- 82 「人気呼ぶ京劇 新春から日本縦断公演――光る 20 歳の主役、紀曉玲」『毎日新聞』1994 年 12 月 13 日、東京夕刊、7 頁、芸能。
- 83 「[ウイークエンド・アミューズメント] 演劇 霸王別姫～漢楚の戦い――大連京劇団」『毎日新聞』1999 年 2 月 26 日、東京夕刊、13 頁、芸能。
- 84 「京劇 日本の劇にもじわり浸透（西からの風:2）」『朝日新聞』2003 年 8 月 12 日、夕刊。
- 85 「おしゃべり映画講座 68『さらば、わが愛 霸王別姫』ほか」『中国の「戦後」を描く三つの映画』淀川長治・杉浦孝昭、『広告批評』169 号、1994 年 2 月、pp.69－73。
- 86 坂和章平『坂和的中国電影大観 SHOW - HEY シネマルーム 5』、オール関西株式会社、2004 年 12 月 25 日、p.108。
- 87 2012 年 9 月 29 日から 10 月 10 日まで横浜中華街 2012 映画祭に佐藤忠男トークショーが開かれた。筆者の質問に対する佐藤氏の答えを聞いた在座の日本人観客は、筆者に向かい大きく頷いていた。
- 88 「カンヌ映画祭最高賞獲得したのに…中国で同性愛的作品の上映禁止」『読売新聞』1993 年 6 月 22 日、東京朝刊。
- 89 「カンヌ映画祭最高賞…中国では上映禁止 『霸王別姫』を上海だけで公開」『読売新聞』1993 年 8 月 4 日、東京夕刊。
- 90 「ブームの中国映画に危機 検閲逃れの大胆作品を警戒、海外との合作を規制」『毎日新聞』1994 年 7 月 7 日、東京朝刊、9 頁、国際。
- 91 「『霸王別姫』は、一時、撮影中止に追い込まれそうになったこともある（杉江幸彦「中華電影の中の日本人」「特集陳凱歌 ― 地下文学から世界電影へ」『すばる』集英社、1994 年 4 月、p.182－187）。「この輝かしい超大作は、不幸なことに中国本土では二回上映されただけで、公開をストップされたまま、主演の京劇男優二人の同性愛を取り扱っていること、文革での過酷な迫害のシーンがあるためらしい」（同前注、石坂昌三「中国系映画パワー『さらば、わが愛 霸王別姫』」、

- p.52)。
- 92 「北京の映画当局の対応：一時は撮影中止になる危険も考えられたからだ。海外の資本と提携し、合作の形で映画を撮ることの是非が問題にされたのだ」。刈間文俊『『霸王別姫』で陳凱歌は、中国の現代史に挑戦する』『キネマ旬報』、1993年5月下。
 - 93 同前注、杉江幸彦「特集 陳凱歌 — 地下文学から世界電影へ 中国電影の中の日本人」、1994年4月、p.182。
 - 94 中国国内の詳しい上映状況は未詳だが、次の資料がある。「私は93年の秋に山東省の済南でこの映画を初めて見ました」（同前注、水野衛子による陳凱歌のインタビュー p.26）、「初めて見た時はとても感動したのでよく覚えています。1993年、北京の天橋劇場です」京劇俳優張紹成インタビュー、『『霸王別姫』・芸術展』の資料集を参考。
 - 95 戴錦華「欧州国際映画祭の役割」『中国映画のジェンダー・ポリティクス ポスト冷戦時代の文化政治』宮尾正樹監訳・館かおる編、御茶の水書房、2006年12月22日、p.109
 - 96 佐藤忠男『中国映画の100年』二玄社、2006年7月、p.204。
 - 97 原文は「陈凱歌执导的《霸王别姬》进入了以前只播放美国大片的日本一类院线，商业发行取得巨大成功。“因为《霸王别姬》是一部内行与外行都能看的电影。”刈間文俊只用一句话就总结了该片的成功所在。」「30年前把『小花』訳成日文為明天在東京上映的『梅蘭芳』担任監修 中日版『牡丹亭』の神秘嘉賓」『姑蘇晚報』2009年3月6日、記者、李婷。
 - 98 「この作品は中国の歴史（現代史）を紐解きながらもエンターテインメント性が高かった。単に体制を批判する社会派でも、アート性の強いものではなく、中国を知らない人にもわかりやすく受け入れられたのだと思います。」配給会社のヘラルド・エース（現アスミック・エース）本多淳一インタビュー、『『霸王別姫』・芸術展』の資料集を参考。
 - 99 同前注、刈間文俊・白井啓介・森繁、座談会、pp.16－17。
 - 100 同前注、刈間文俊「霸王別姫の周辺」、p.173。
 - 101 原題『当愛已成往事』、陳凱歌の要請によって李宗盛が1992年制作。
 - 102 「アメリカ版についてですが、私はオリジナル版の完成に全精力を尽くしていましたが、そのオリジナルからさらに編集を加えたバージョンに関しては、編集という立場から納得できないものでしたので、ほとんど覚えていません。アメリカ版編集に関しては、監督の意図というよりは、アメリカの配給会社の意図であったと記憶しています。確か、子供時代や京劇シーンをパツリカットしたものだと思います」。日活スタジオセンター編集担当の西原昇インタビュー、『『霸王別姫』・芸術展』の資料集を参考。

- 103 同前注、刈間文俊「覇王別姫の周辺」、p176。
- 104 水野衛子シナリオを参考。
- 105 同前注、水野衛子シナリオ、p.175。
- 106 同前注、水野衛子シナリオ、pp.219 — 221。
- 107 サイト「Cinema Scape— 映画批評空間」より <http://cinema.intercritique.com/comment.cgi?u=2085&mid=814>
- 108 岸陽子（早稲田大学教授）「『さらば、わが愛 — 覇王別姫 —』の世界」『交流簡報』、1994年3月1日。
- 109 同前注、水野衛子シナリオ、P.23。
- 110 同前注、前注杉江幸彦、p.183。
- 111 西原昇インタビュー、「『覇王別姫』・芸術展」の資料集を参考。